

★医療交流でみたキューバの医療(下)細川誉至雄(北海道勤医協札幌病院医師)

キューバの高次医療機関との医療交流

第1回目(2009年3月)は私も含め呼吸器科の医師が5人参加、INOR(がんセンター)というがんの専門病院です。日本ではすでに胸部写真やCT検査によって早期の肺がんが多数発見され、カメラによる胸腔鏡手術が行われていました。

INORでは胸腔鏡手術を導入したいとの意図があり、交流に先立ちSTORZ製(ドイツ)の真新しい器具を購入し準備していました。回診やカンファランス、そして講演があり私はWindowsが使えるのか、手術動画が動くのかなど不安がいっぱいでしたが、無用の心配でした。しかし、回診や症例検討、肺癌の手術に入ったりする中で前評判とは違うのではないかと思いはじめました。

胸部写真に撮影日が入っていない、写真自体を患者が丸めて自分で持ち歩き管理する、回診の時ベットの下から取り出したりするためフィルムは手あかだらけ、また自覚症状が無いと胸部写真を撮らないため進行肺癌で発見されるのがほとんど、写真の画像も鮮明ではない(1枚1枚現像液に浸して乾かす)等々でした。気管支鏡も日本からの寄贈に頼る状態で、CTは人口220万人のハバナ市でまだ10台のみ。一方、喫煙率も約40%と高く禁煙が普及しない中、全国から肺がんの患者がINORに押し寄せてくる、その9割以上は手遅れの進行がんです。

カンファランスで手術対象となる患者を検討しても、やっと切除できる例が1例あるかどうかです。一緒に手術に入ってみると自動縫合器もロシア製、糸も中国製ですべりも悪い(安価のため)。日本の20~30年前を思い出し、そのギャップに愕然としました。

しかし、その後2回、3回と訪問を重ねるうちに医療器具も少しずつ整備されPET-CTも導入、年に数例ですが胸腔鏡手術も始めていました。医療機材が不足する中でも高度の医療を行いたいという気概が伝わります。2018年にはCT検診も検討中と聞いて、まだ早いのではないと思いましたが初回訪問から10年で診断技術も相当進歩しています。また4回目以降は交流内容を拡大し、CIMEQ病院では胃がん手術を実演、また睡眠時無呼吸症候群について活発な議論を行い、5回目、6回目にはガルシア病院やハバナ大学でも交流を行いました。

米国のキューバに対する経済制裁の罪

米国が国交断絶に加えて一方的に経済制裁を 60 年近く加えたため、経済回復ができない最大の理由となっています。医師もみな公務員ですから月収も他の職種と変わらず米ドルで 20~30 ドル (2 千円超) 程度で日本とは物価も違うとは言えあまりにも安い。キューバ人のプライドがまさに苦難の歴史の中で生き抜いてきた「したたかな国キューバ」(西林万寿夫前キューバ大使著 3 年半の回想録) を支えてきたのかもしれませんが。米国は理不尽なキューバいじめを即刻止めるべきです。

キューバは子供や高齢者を大切にする国でもあります。元気な笑顔の子供たちをみると明るい未来を感じます。幸い日本とは長く友好関係を保っているので行ったことのない方はぜひ訪問してみてください。(了)

写真 2 ヘミングウェイ博物館 小学生にカメラを向けると集合しピース



お詫び (上) で筆者の名前と肩書に誤りがありました。訂正してお詫びします。